

令和4年度 MieMu の活動と運営の外部評価結果（概要）

【評価結果】

- 学芸員の年間の研究成果公表数は、今年度から対象を図録や地域への活動支援報告へも拡大した結果、目標（13回）を上回る25回、また、未発表者の数も減少（8→6名）し、「4」とした。しかし、昨年度の実績（34回）を下回ったことや、昨年度と同様に職員毎に偏りが大きいという課題は解消できていない。改めて、単年度での解決は無理でも、複数年度を通じた実態把握と結果に基づく改善を求めたい。また、評価対象が依然、論文や刊行物等印刷物中心であることは検討の余地がある。
- 資料データベースの閲覧回数（5,516回）は、昨年度（6,107回）をやや下回ったものの、目標（5,000回）を上回り、「4」とした。また、新規データの登録（3,082件）は昨年度（763件）より大幅に増加し、データの更新も適宜実施できており、今後も継続して進めて欲しい。
- 資料の保全・継承は、目標とした定期清掃・点検を実施した結果、今年度は虫害等の発生件数を「0」に抑えることができ、「4」とした。一昨年度・昨年度と続いた虫害発生を抑えることができたことは評価できる。当館では、多種・多様な資料を扱う困難さはあるが、引続き確実な定期点検に努められたい。

戦略1の達成状況については、①資料の収集について合計17件の新資料が獲得できたこと、②保管について収蔵庫の定期点検を通じて良好な状態を維持できたこと、③資料の整理・管理についてデータベースへの新規登録や更新が順調に進んだことに加え、④調査研究の成果について3本の企画展を通じて、これまでの成果の蓄積を広く公開できたことは、博物館の基礎的活動の成果としておおいに評価できるため、「4」とした。
- 基本展示は、トピック展2本を併設して観覧者の獲得に努めた結果、昨年度実績（34,990）と比較すると126.1%と一定の回復が見られたものの、目標（54,500人）には未達（44,120=81.0%）であり、「2」とした。内部評価の検討過程では、昨年度の指摘を反映し、観覧者の動向について詳細な分析ができており、今後、結果を活かした事業展開や観覧者の確保を期待したい。
- 企画展示は3本を開催し、指標の観覧者数は、「三重の円空」では目標の87%（11,328/13,000人）を獲得できたが、「名所発見」は52.8%、「集まれ！三重のクジラとイルカたち」では62.2%に留った。秋以降に比べて春先の学校団体による利用が少なかったことが、「名所発見」には影響した考えられる。こうした点も考慮し、本戦術の評価は「2」とした。基本展示と同様に観覧者の動向について詳細な分析ができており、今後の企画展の計画立案に大いに活用して欲しい。

以上の展示に関する戦略 2 は、基本展示と企画展示の全体を通じて目標 (70%) を達成 (72.6%) できたことから「3」とした。しかし、データの基礎となる観覧者の獲得目標が未達であることや、昨年度と比較して基本展示の値が低下 (75.2→72.7%) したことから、企画展示の一部で 64.9% に留まったことは課題として残った。

- ・今年度は伊賀地域を対象に、地域への理解を深めてもらうことを目的とした参加型調査として市内の小学校 19 校 (2,197 人) を対象にしたアンケート調査を実施した。移動展示は来年度に実施する。本評価では、移動展示の開催に至らなかった状況下では、「評価不能」と判断するとともに、課題を後の【提言】で指摘した。
- ・地域の魅力を伝えることを目的とした学芸員による出張講座は、目標 (利用者数 1,120 人) を大きく上回る利用 (62 団体 2,619 人) を得ることができた。団体数・人数ともに昨年度 (37 団体 1,984 人) を大きく上回ったことから、「4」とした。

以上の地域への愛着を育むための戦略 3 は、学芸員講座での利用者の満足度が 95% と、目標 (75%) および昨年度実績 (88.2%) を大きく上回ったことから、「4」とした。しかし、本戦略は本来、移動展示での満足度も含めて評定する必要があるため、来年度の結果をもって最終判断とすべきである。

- ・ミュージアムパートナーについては、グループ活動を含めてさまざまな事業を実施し、目標 (利用者 1,700 人) 及び昨年度 (1,711 人) を大きく上回る 2,352 人の参加者を獲得することができたことから、「4」とした。また、会員数は 155 組 276 名で、今年度は、退会 14 組 38 人に対して 21 組 50 人の入会があり、会員が増加したことも評価できる。月毎に事業の多寡があるようなので、分析結果に基づく会員ニーズの把握に努め、計画的な事業実施が求められる。
- ・コーポレーション・デーは、コロナ禍で参加企業や団体の確保が困難な中であって、2 回実施することができた。その上で、昨年度 (778 人) だけでなく、目標 (5,000 人) を上回る入館者 (5,726 人) が得られたことは高く評価でき、「4」とした。
- ・研究機関等との連携では、昨年度の外部評価の提言を受け、目標値を連携展示の観覧者数などを除いた実質的な利用者数とした。その結果、利用者は大学が 147 人、県立研究機関が 61 人、他県の博物館等が 135 人の合計 343 人で、目標 (240 人) を大きく超えて達成できたことから、「4」とした。一方で、新たな連携先を模索したものの、現状は固定的であるため、引き続き新たなパートナーの確保に努めることを期待する。

以上の県民・利用者の参画に係る戦略 4 の達成状況は、研究機関との連携

のごく一部で「4 満足」が得られなかったものの、その他においては連携先の各団体から満足する結果（8/9 団体=89%）が得られたことから、「4」とした。昨年度は、「4 満足」の割合が、5(ないし 6)団体中の 3(ないし 4)団体にとどまり、目標（75%）には届かなかったことに比べ、改善が進んだと評価できる。連携には、相手先との情報や認識の共有、意思疎通が不可欠なので、その確保に努められたい。

- HP や情報誌を通じた県民への情報提供は、「MieMu@ほーむ」で年間を通して目標（4,800 回）を超えるアクセス数（4,871 回）をコンスタントに獲得でき、「4」とした。また、定期的に刊行する「みえんしず」（4 回刊行）でも、平易な表現に配慮しつつ、タイムリーな情報提供ができた。一方で、HP の全アクセス件数が昨年度よりも増加している（475,679→494,671）ことに比べ、当該箇所への件数が減っている（5,626→4,871）ことは、後者がコロナ禍での在宅利用を念頭に始まった企画とはいえ、今後、工夫が必要と思われる。
- 「調べ方」を学ぶ事業は、学芸員との対面事業を中心に、6 事業 11 回を実施し、目標（160 人）を上回る利用者数（195 人）を確保できたことから、「4」とした。各事業のうち、事前申し込みを伴う事業では、倍率が 4.6 倍に上る事業もあったことから、利用者ニーズに応えることができる定員や回数、さらには目標設定を検討する必要がある。

学芸員が知的資源やその活用方法を伝える戦略 5 は、従来、県内在住者を対象として県が実施する「e モニター」事業の成果を通じて評価を行ってきたが、今年度は県側の事情で、例年通りのデータ収集ができなかった。そのため、「評価不能」とした。下位の戦術がそれぞれ、「4」であったことから、本戦略の評価ができなかったことは残念であり、また、経年変化を見ることができないデータが一部欠落したことになる。来年度は確実にデータ取得ができるよう求めたい。
- 「こども体験展示室」は、昨年度の目標（60,000 人）がコロナ禍の影響を考慮しない無理な設定であったため、昨年度の概要で実態に即した修正を提言し、年間利用者数 5,300 人に修正した。年度末に利用制限を緩和して利用枠を拡大したものの、実績は目標を大きく上回る 8,154 人で、「4」とした。妥当な目標とすることで、適正な評価につながったと考える。
- 子どもたちが五感を使って体感できる事業は、7 事業 33 回を実施し、目標（1,200 人）を上回る参加者（1,440 人）を得たことから、「4」とした。昨年度（634 人）や一昨年度（343 人）を上回った点とともに評価できる。
- 学校と連携した課題探究型学習の支援は、年間を通じて高等学校 3 校（1,019 人）の支援を行ったが、目標（1,500 人）の 2/3 に留まったことから、「2」とした。担当職員の異動や減少があったとはいえ、昨年度（2,714 人）を大き

く下回ったことから、改めて事業の実施方法や推進体制を見直す必要がある。

次世代の育成を目標とした子どもたちの学習機会の充実（戦略6）は、37事業の参加者アンケート（930件）の内、19歳以下（359件）の満足度を調べた結果、84.7%（304件）が「4満足」であったことから、「4」とした。本戦術の昨年度（82%）、一昨年度（77%）の結果を上回った点からも、事業の効果が確実に浸透していることがうかがえる。引き続き安定した事業実施と成果の確認、改善を期待したい。

- ・業務の改善に向けた定期的な進捗管理は、四半期ごとの全体会議を通じて、一定数（6件）の課題を抽出するとともに、外部評価での改善指摘11件とともに、その改善策の検討と進捗管理ができた。本戦術の目標値が7件であったことから、「4」とした。また、昨年度には、外部評価での指摘事項の一部が進捗管理の対象から漏れていた点についても、改善が図られた。

戦略7は、上記の課題（6+11=17件）のうち、16件について改善が図られたことから、「4」とした。また、昨年度の「昨年度と同様、あるいは指摘にも拘らず後退した項目が認められる」と比較しても、進捗管理を含めておおいに改善が進んだと評価できる一方で、後述の通り一部に未解決の課題が残っていることから、次年度以降も引き続き解決に取り組まれない。

【提言】

まず、評価指標について、戦術1及び戦術6について指摘したい。戦術1の調査研究成果の公表については、指標が論文などの著作物が中心となっていたため、昨年度の提言で範囲の拡大を指摘したところ、今年度は対象に「図録や活動支援報告書」が加えられた。しかし、戦術1の目的が「資料収集および調査研究を行う」であることから、成果の対象（範囲）をさらに拡大すべきではないかと考える。具体的には、講演会・講座での発表や、研究成果の集大成ともいえる展示も念頭に置いた成果指標の設定を検討されたい。また、調査研究だけでなく、資料収集についてどのように評価するのか、検討が必要と考える。

次に戦術6の「参加型調査を実施し、その成果を用いた移動展示を実施」は、そもそも「調査」と「展示」の2つの事業を実施することになっている。そのため、両者を同一年度で実施する場合には、現在の指標である利用者（展覧会観覧者）での評定が可能である。しかし、今回のように調査と展示を別の年度で行う場合には、年度によって指標（調査参加者数と展覧会観覧者数）を使い分ける必要があるが、年度毎に指標が変わることには、経年変化を見る場合（定点観測）には問題が残る。戦術の内容あるいは事業期間を再考する必要がある。

次に、改めて戦術と戦略の関係について指摘したい。当館の評価システムは現在、ロジックモデルの考え方に沿って、16項目の戦術と7項目の戦略から構成している。各戦術にはそれぞれの指標と目標を定め、結果(アウトプット)を評定している。また、戦術の上位には戦略を掲げ、指標と目標を定め、成果(アウトカム)を評定する仕組みとしている。両者の基本的な関係は、個々の戦術が達成されることによって戦略の成果が上がるのが前提であるが、必ずしも両者の結果が一致するとは限らない。例えば、戦術(個別の事業)の結果が出ていても、それによる成果の発現(=状態の変化)に時間を要する場合には、両者は不一致となる。そのため、戦術と戦略の評価には、それぞれ固有の指標を設定している。換言すれば、戦術の平均点そのまま戦略の結果には直結しない、という構造である。今回の戦略1(「収集・整理・管理、調査研究の強化」)の評価に当たり外部評価では、先の①から④の達成度に留意しつつ、戦術1から3の平均点ではなく、④を調査研究の強化の集大成と捉えて、「4」と評価した。

戦略の評価に当たり、外部にレビュー(特に、定性評価)を依頼する場合などでは、この点に留意する必要があることを改めて指摘しておく。

最後に、『評価シート』の記述について、昨年度も「指標の分析結果」・「評価理由」・「改善視点」を峻別する必要性を指摘した。今年度、こうした部分はかなり改善されたものの、未だ三者を峻別できていない箇所が散見される。こうした部分で誤解や混乱が生じては事業の課題や今後の改善視点を見誤ることになり、評価の目的である改善、さらにはモチベーションの向上も困難となる。改めて、評価が「事実の特定+価値判断」であることを基礎に、三者を峻別した分析を求めたい。

【まとめ】

今年度の評価については、次の点を指摘したい。

- ・内部評価では、定量的でわかりやすい根拠資料(判断材料)が示され、それに基づく適正な評価が行われていると考える。
- ・コロナ禍を考慮して、目標を当初から変更(戦術10・13、戦略7)して妥当な値にしたことで、適正な評価とPDCAサイクルの循環が達成できた。
- ・戦略7で示された通り、課題の抽出やその改善が進んでいることは、本制度の成果と評価できる。
- ・戦術1の成果公表者の偏りや戦術10の連携先の固定化など未解決の課題が残ったことおよび戦略5の事実特定に必要なデータが取得できなかったことについては、改めて解決・改善に努められたい。

当館の評価は、第3期(2020~2023年度までの4カ年)に入り、その3年目

である今年度の結果を見ると、戦術については、「4」が12項目、達成度に難がある「2」は3項目、「評価不能」が1項目である。また、戦略の結果は、「4」が5項目、「3」が1項目、「評価不能」が1項目である。

2020年度や2021年度と比較して、いずれも評価が向上していること、特に2022年度はおおいに改善が進んだ証として評価できる。しかし、コロナ禍といえども、博物館活動の要とも言える展示に関する2項目（戦術4・5）がいずれも「2」であったことは残念であり、来年度以降の奮闘を期待したい。

ところで、戦略を成果（アウトカム・インパクト）と捉えると、毎年、評定することは前年度との比較や当該年度全体の動きを見るには役立つかも知れないが、本来は状態の変化であり、複数年を通じて、経年変化を見る必要がある。こうした観点から、定量データが比較可能な5つの戦略について、過去3年間の変化を追ってみた。

戦略2（72→72→73%）、戦略3（×→76→95%）、戦略4（×→75→89%）、戦略5（74→70%→×）、戦略6（77→82→85%）

上記から、一部で比較データの無い年度もあるが、戦略2については平衡状態、戦略3・4・6については状態の良化が見て取れる。別表に示す数字とともに、こうした点からも、この3年間において、当館における改善やサービス向上が確実に進んだと判断できる。

別表 評定点の推移（2020～2023年度）

戦略	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	戦術	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
戦略1 (01)(A)	3	3	4		戦術1	4	4	4	
					戦術2	4	4	4	
					戦術3	2	2	4	
戦略2 (01)(02)(03) (A)	3	4	3		戦術4	3	4	2	
					戦術5	3	2	2	
戦略3 (03)(A)	-	4	4		戦術6	-	4	-	
					戦術7	4	4	4	
戦略4 (02)(B)	-	2	4		戦術8	3	4	4	
					戦術9	2	1	4	
					戦術10	4	4	4	
戦略5 (02)(B)	2	2	-		戦術11	4	4	4	
					戦術12	2	4	4	
戦略6 (02)(B)	3	4	4		戦術13	-	1	4	
					戦術14	2	2	4	
					戦術15	4	4	2	
戦略7 (業務改善)	2	2	4		戦術16	3	3	4	
合計	13	21	23			44	51	54	
百分比(※)	65%	75%	96%			79%	80%	90%	
「4」の個数	0	3	5			6	10	12	
「3」の個数	3	1	1			4	1	0	
「2」の個数	2	3	0			4	3	3	
「1」の個数	0	0	0			0	2	0	
「-」の個数	2	0	1			2	0	1	

「-」は評価不能。

※は、評価不能を除く全項目の評定が「4」であった場合を100%とした際の達成割合